

佐竹亮一郎は格子戸を乱暴に閉め、踏み石を編み上げ靴でガツガツ踏みつけながら歩いた。家の中に入り土間で靴を脱いでいると、廊下を横切った婆さんが「あら、旦那様。随分とお早いお帰りで」と皺だらけの干し柿みたいな顔で笑った。「ん」とだけ無愛想に返事をして廊下上がり、これまたドンドンと足音をたてて騒々しく歩く。

「徳馬、徳馬」

大声で名前を呼びながら、座敷にゆく。黒い革靴を放り投げ、中折れ帽を畳の上に叩きつける。床の間の前にドカリと胡座をかき、腕組みをして眉間に皺を寄せていると、ほどなく着物を襷がけにした田中徳馬が入ってきた。白い額に浮かぶ汗を拭い、にっこりと笑う。

「…何がおかしい」

徳馬は笑った顔のまま、こめかみの脇でパチリと指を鳴らした。

「俺が怒っているのがそんなにおかしいか」

頷き、徳馬は亮一郎の前に正座した。そして開け放った障子の向こうに見える庭を指差し、右手で畳を掻くような仕草を試みさせた。

「なんだ、庭掃除をしていたのか」

ゆっくりと頷く。

「掃いたって仕方あるもんか。いくら掃除をしても花びらが全て落ちきらんことには、あとからあとから

降ってきて元の木阿弥だぞ」

庭にある桜の老木は満開だった。猫の額ほどの狭い場所には、ほかにもアマチャ、石楠花、ウワミズザクラが所狭しと植えられ、花をつけている。桜はもとから借家の庭に植わっていたが、小花は全て亮一郎が植えたものだった。

「旦那様、お茶を召し上がられますか」

廊下から、婆さんが顔だけ出して聞いてくる。

「ああ、頼む。徳馬の分もだぞ」

「ハイハイ」

婆さんはしまりのない返事をして、奥へと引っ込んでいった。すぐに熱い茶が運ばれてきて、その匂いを嗅ぐと同時に、亮一郎は「んっ」と首を傾げた。

「懐かしい味がするぞ」

婆さんは「そうでしょうとも」と浅く頷いた。

「徳馬さんが里へお帰りになった時、買ってきてくださったんですよ」

「へえ」と呟き、口に含む。田舎の番茶は、無骨で素朴な味がした。先月、亮一郎は徳馬を二週間ほど実家に帰らせた。母親が倒れたという電報があったからだ。一時は起き上がれぬほど悪かったようだが、辛い医者が出した薬がよく効いて、四、五日でよくなった。これまで病気のひとつもしたことのない女だっただけに、風邪をこじらせたぐらいで寝込んだことが甚だ応えていたようだ。徳馬は話していた。

「そういえば、あれから里より便りはあったか」
徳馬はにこりと微笑んだ。

「トミ江の具合はいいようか」
ゆつくりと頷く。

「それなら結構」

婆さんは盆を下げながら「本当にねえ…」とため息をついた。

「徳馬さんのいない間は旦那様のお世話がそりゃあ大変でしたよ。まずもって目を覚ましてからの一言が

『徳馬』ですからねえ」

婆さんはしみじみと呟く。亮一郎は「大変なことなどあるものか」と強い語調で言い放ったが、婆さんは「いえいえ」と首を横に振った。

「洗面の水をお持ちすれば、やれ冷たいだ、熱いだと文句を仰られる。春先ですが少々朝が寒うございましてから、厚手のシャツをご用意したところ、冬でもないのにこんな厚手のものが着られるかと怒られる。床の用意をいたしましたしても、障子から遠くに敷きすぎてどうも調子が悪いと、お休みになる際まで小言を仰られたじゃありませんか」

徳馬の手前、亮一郎はきまりが悪くなった。婆さんに視線をやり、牽制の意味でチツ、チツと舌打ちするものの、調子に乗った女の口は止まらなかった。

「旦那様の奥様になられる方は、最初に徳馬さんから旦那様の『お作法』をお習いしなくちゃいけません

ねえ」

亮一郎は意地になって「俺の作法なんぞ、どうでもいいだろう」と食ってかかった。婆さんは言うだけ言うと気が晴れたのか、早々に座敷をあとにした。怒りの矛先を失って「クソッ、クソッ」と舌打ちしながら、ゴロリと畳に寝転がる。苛立ちのまましばらくゴロゴロと寝返りを打った後、最後は二つ折りの座布団を枕にうつ伏せになった。

「徳馬、肩を揉め」

音もなく傍にやってきて、亮一郎の背に馬乗りになる。腰骨にずしりと重みを感じ、相手の股間が布越しの距離にあると想像しただけで、亮一郎の下は熱くなった。強い力でグツと肩を押されると、邪な感触と共にじわりと染み入るような心地よさが全身に広がる。

「大学というところは、学のある志高き者が集まる場所だと思っていたが、一概にそうも言えんぞ」

口のきけない徳馬から返事がないことを知りつつ、亮一郎は喋る。

「昼に助手と学生の数人で蕎麦屋へ行ったのだ。その時にたまたま田舎の話になった。俺は子供の頃、公開処刑の見物に行ったことを話した。西洋人は人の皮を剥いで脂を取ると信じた百姓が一揆を起こして、首魁が斬首されたことあっただろう。お前も一緒に見物に行ったから覚えてるよな。その話をしたら、助手の福島が『明治の御時世に、西洋人が人の脂を搾り取ると思い込むなんてナンセンスだ。君の田舎は野蛮人の集まりだねえ』と言いやがった」

寝転がったまま、亮一郎は拳で畳をドンと叩いた。

「麴^{こう}祭りの神事『牛追い』で、供え物の牛が毎年神社の境内から消える話でしたが、その時も鼻先で笑いやがった。『そういう役回りになった誰かが、いなくなったように見せかけて隠しているんじゃないのかい。話を聞きかじった私でも想像できることだよ。まさか君、その歳まで牛が消えると本気で信じてたんじゃないだろうね』とな。あんまり腹がたつたから、食いかけの蕎麦を頭から引っかけて『バカヤロウ』と怒鳴ってやった」

もういい、と声をかけると、徳馬は腰から降りた。向かい合うと、女々しく愚痴ばかり零す自分が急に恥ずかしくなった。

「掃除の続きでもしたらどうだ」

徳馬は頷くと、座敷を出ていった。亮一郎は相変わらず畳の上でゴロゴロしていたが、庭を掃く軽快な竹箒の音につられて縁側まで出た。

夕暮れの小さな庭に落ちた屑や花びらを、徳馬は丁寧に掃き集めていく。その顔は透けるように白い。東北から出てきた人間は、雪に肌の色を吸い取られて白くなるというが、徳馬もよく北の人間と間違われる。母親であるトミ江はたいそう色黒なので、似たとしたら死んだという父親なのだろう。

頭も顔も小さく、目鼻立ちはすっきりしている。どちらかといえは女顔で細身だが、田舎の人間らしく健脚で、山歩きに慣れた亮一郎でさえ、徳馬の足の強さにはかなわなかった。

亮一郎が乳母である女中トミ江の息子、徳馬を連れて第一高等中学予科に通うため上京したのは十六歳の時だった。予科、本科、大学と進み去年、帝国大学理科大学の助手を拝命した。

九年前、田舎を出る際に「徳馬を東京に連れていく」と言うと、父親は甚だ呆れた顔をしていた。「口のきけない男を連れて行って、役にたつのかね」そう言われ、「自分は癩癩持ちなので、あれこれと口うるさい使用人よりも、喋れない徳馬でちょうどいい」と答えると、父親は笑っていた。

身の回りの世話が必要という名目で連れてきたが、年上の乳兄弟を田舎に置いておきたくなかったというのが本音だった。亮一郎の上京が決まると同じ頃、徳馬に縁談が持ち上がった。相手は隣村の、口のきけない娘だった。いくら見目がよくても喋れなくては相手など見つからないだろうと高をくくっていただけに、これは目の届かないところには置いておけないぞと思った。

亮一郎が徳馬への恋心を自覚したのは中学の頃だった。それまでは早熟な友人が近所の娘の話をしているのを聞いても「ふしだらだ」と軽蔑するだけで、さして興味も湧かなかった。

その年の冬、亮一郎は何年かぶりに大風邪をひき込んだ。幼い頃に病気で死にかけたこともあり、父親は慌てて遠方より医者を呼んだが、熱はなかなか下がらず三日ほどウンウンうなされた。そうして四日目の朝、ようやく熱も下がり、目を覚ました亮一郎が見たものは、自分の傍らで潰れるように寝ている徳馬の姿だった。

血管が透けて見える白い手首。青白い臉に長い睫毛。唇は薄く、そして赤い色をしていた。綺麗だと思っ
て見ていると、腰の辺りがむず痒いようにズクリと疼いた。それまでも白い、細いという印象はあったが、容姿を気にしたことはなかった。徳馬は徳馬であればよく、乱暴な言い方をすれば見目などどうでもよかった。